

謝罪会話から見た逆接系接続助詞

一場面深刻度と人間関係に着目して

韓開(東北大学大学院生)

1. はじめに

謝罪は話し手の行為が聞き手を害したことで崩れた平衡関係を修復しようとする行為である。謝罪を実際に行う場合、「すみません」といった基本的な謝罪の言葉だけではなく、相手の反応や態度を読みながらさまざまな行動を取ることがある。一方、謝罪を受ける側も、失われた自分の利益を相手に補償させるため、種々の方策を用いて交渉を行なう(ボイクマン・宇佐美 2005)。両者の話しをうまく進めるために、文末に「ので」や「けど」のような接続助詞の使用がしばしば観察される。このような接続助詞は言いさし表現として捉えることが多い(永田 2001; 朴 2008; 小此木 2020 など)。また、会話の構造や機能からの分析は得られているが、場面深刻度と人間関係における言いさし表現の使い分けに関する研究は管見の限り見当たらない。謝罪会話の場合、人間関係や場面に応じて謝罪の方法が選択されることが一般的である。そこで、本発表では、場面深刻度と人間関係をもとに、謝罪会話における接続助詞「けど」の使用特徴を考察する。他の会話に比べて謝罪会話では、過去の誤解や過ちについて説明する必要があることが多く、謝罪の背後にある理由や状況を説明するために「けど」を使うことで、相手に状況を理解してもらいやすくなる。

2. 先行研究

謝罪の先行研究について、頼(2005) 郭(2013)がある。頼(2005)では、依頼や非難の場面で行われる謝罪表現を分析している。しかし、謝罪場面での謝罪表現の機能、また、謝罪表現の前後の意味内容は考察されていない。郭(2013)は、上下、親疎関係が謝罪への返答に与える影響を考察した。しかし、謝罪会話は謝罪側と被謝罪側間のやりとりであって、被謝罪側だけでは不十分である。

接続助詞の先行研究について、三原(1996) 曹(2000) 永田(2001) 小此木(2020)がある。三原(1996) 曹(2000)は、終助詞の用法に焦点を当て、言い終わりの「けど」の基本的な機能を考察する。永田(2001)は、談話におけるトピックの展開と turn-taking の観点から言いさし表現としての「けど」は提示された発話内容がその後のトピックとなることを明示する機能とその後の談話の進め方を完全に相手に委ねてしまうことを示す機能を持つということを指摘している。小此木(2020)は、依頼会話における言いさし表現の「けど」の機能を「情報要求」「情報提供」としている。以上の先行研究は言いさし表現の「けど」の機能をさまざま指摘している。しかし、会話の全般的における「けど」の使用について考察されたものの、人間関係と場面深刻度などの要素は考慮されていない。そこで、本発表では具体的な使用場面に応じて、文末の「けど」の使用特徴をより詳細に分析する。

3. 会話データ

研究対象としたのは、ロールプレイの形で収集した144回分の謝罪会話の中で文末に現れた「けど」である。会話場面は借りた本の状態によって、場面の深刻度は軽い(本を忘れた)、中くらい(本を汚した)、重い(本をなくした)の3つに設定する。人間関係は、上下関係(学生と先生)と対等関係(友達)の2つに設定する。人間関係には上下関係と対等関係があるため、それぞれに上記の会話を行うと、合計で12回の会話が行われることになる。以上の手順に従い、144回分の会話データを収集した。総会話時間は計146.18分である。

4. 分析

4.1 分析対象

144回分の謝罪会話データを調査し、接続助詞で終わる文末表現の種類と出現回数が以下の表1に示す。

表1 接続助詞でおわる文末表現の種類と出現回数

文末表現	けど	で	から	ので	だから	が
回数	176	54	36	34	10	5

表1 から謝罪会話の中で文末表現「けど」を使う傾向がある。本発表では、出現回数の高い「けど」を分析対象にして、考察を行う。

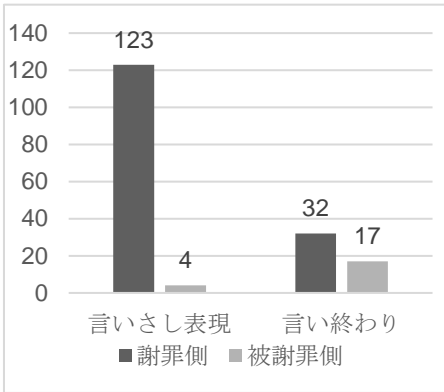


図1 文末の「けど」の使用状況

収集した会話の中で文末に現れた「けど」は計176件があり、謝罪会話における言い終わりの「けど」と言いさし表現の「けど」の使用状況は図1に整理した。また、言い残しの有無によって言いさし表現の「けど」と言い終わりの「けど」を区分する。

図1を見ると、謝罪会話の中で「けど」は言いさし表現として多用されることが分かる。謝罪側と被謝罪側の使用状況を比較して見ると、謝罪側は「けど」を言いさし表現として使う傾向がある。逆に、被謝罪側の場合、「けど」は言い終わりの表現として使っている。「けど」が言いさし表現として多用される原因の一つは謝罪会話の中には被謝罪側の態度や要求に対して、謝罪側が謝罪の策略を調整する必要があるためである。言いさし表現の「けど」を使用することで、謝罪側は自身の発話を完全に言い尽くさず、相手に発話の余地を与えることができる。これにより、謝罪側は被謝罪側の反応や要求を読みながら謝罪の

進め方を調整し、適切な対応を行うことができると考えられる。

4.2 分析の結果

4.2.1 言いさし表現の「けど」

謝罪側の場合、言いさし表現の「けど」は「前置き」「相手伺い」「弁明」の3つの用法がある。被謝罪側は「けど」を言いさし表現として使う場合が少なく、「相手伺い」と「追及」だけである。ただし、被謝罪側の使用数が少ないため、本節では謝罪側に着目して考察を進めていく。場面深刻度と人間関係によると、対等関係より上下関係の場合、謝罪側が言いさし表現「けど」が多用される。また、上下関係においては、「前置き」と「相手伺い」の用法が比較的多く見られる。特に、「前置き」ではいずれの深刻度にも多く使われる。対等関係においても前置きと相手伺いの場面での使用が見られるが、上下関係に比べて使用頻度は低い。弁明においては上下関係・対等関係のいずれの場面でも使用頻度は比較的低い。実際の会話例に基づいて、これらの使用特徴を考察する。

会話例(1)前置き

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

01S: 今日、本を借り、返、借った本を返す
予定だったんですけど。

02G: うん。

03S: 忘れちゃったので。

04G: あ↑

会話例(1)は謝罪側が被謝罪側の本を返すことを忘れた場面である。謝罪側は言いさし表現「ですけど」を使い、本の問題を提起し、本を返せない旨を被謝罪側に伝える。謝罪会話において、具体的な問題や要求について話し始める前に、謝罪側が話題を提起することで相手の注意を引き、話しやすい状況を作り出すことができる。また、上下関係の場合「申し訳ないですけども」のような形で話題提起が行われることもある。このような「けど」の用法は相手への配慮表現とみなすことができる。相手の気持ちを傷つける可能性のある場面で特に必要になる。そのため、上下関係の場合、「けど」はいずれの深刻度にも多く使

われる結果になったと考えられる。以上の用法について、朴(2008)では、終助詞の用法として捉えている。しかし、謝罪会話の場合、前置きの「けど」は使用する必要があると考える。例えば、会話例(1)の場合、謝罪側が発話01Sによって実際に伝えたい内容は発話03Sの「忘れちゃった」ことである。つまり、謝罪側は最初に本をなくしたことを言わずに言葉を濁して、発話の前後関係から省略の部分を補って考えなければならない。さらに、謝罪側が謝る必要なのはどのように被謝罪側に提起するかを悩んでいる。この不確定の気持ちを含めて言い切りの表現を使用せず、言いさし表現「けど」を使って発話を続けている。

謝罪会話の中で「相手伺い」用法は以下の「判断を被謝罪側に委ねる」「解決提案をあげる」の2つの場合に使われている。会話例(2)は、謝罪側が借りた本を汚した場面である。発話09Sを通して、謝罪側は本の汚した状況を謝罪側に示す。発話の最後に「ですけども」を付け加えることにより、その後の判断を相手に任せる。発話権を被謝罪側に渡し、被謝罪側の判断で、発話を続けられるようになる。永田(2001)は、この場合の「けど」は後の談話の進め方を完全に相手に委ねてしまうとしている。謝罪側が「ですけども」といった表現を用いることで、自身の主張や状況を述べた後に相手の意見や判断を求める

会話例(2)相手伺い(判断を被謝罪側に委ねる場合)

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

06S: ちょっと本を汚して [しまつて:]

07G: [あ↑]

08G: どのぐらい?

09S: えっと、こんな感じなんですけれども。

10G: あ、読めるので大丈夫です。

ことができる。これによって、相手が自身の意見や感想を述べる機会を与え、より対話的なコミュニケーションを実現することができる。

会話例(3)は被謝罪側の本をなくした場面である。謝罪側は「今買い換えるとかしますけど」の発話において、「けど」は誠意を示す。この「けど」は、前段の発話で述べられた事柄(本をなくした)に対して、積極的に対応する姿勢を示すために使用されている。「けど」を使うことで、謝罪側は相手に「この問題に対しての具体的な解決策を考えています」という意思を伝えることができる。と考える。

以上の分析から、「けど」が「相手伺い」用法の場合、謝罪側は「けど」を通じて相手の意見や判断を求め、積極的に対応する姿勢を示すという情報を伝達できると考えられる。場面深刻度が重くなるにつれて、謝罪側は相手の意見や感想を尊重し、相手の判断に委ねる姿勢を示すことが求められる。そのため、「相手伺い」用法が比較的多く見られる。

会話例(4)弁明

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

08G: うん:一応(.)よく探しましたか?

09S: そう:ですねはい、めちゃ探したんですけど。

10G: そうか。

会話例(4)は被謝罪側の本をなくした場面である。発話10Gにおける被謝罪側の発話により、被謝罪側が本をなくした事実を受け入れることが分かった。この場合、「けど」で終わることで、謝罪側は許されたい気持ちを相手に伝え、情報を暗示的に表現する機能を持っている。「けど」を用いることで、謝罪側は自身の努力や取り組みを示しながら、同時に被謝罪側に対して許しを求める意図を伝えている。これにより、謝罪会話の円滑な進行や相手との調和を図ることができると言える。

4.2.2 言い終わりの「けど」

謝罪側の場合、言い終わりの「けど」は「説明」「謝罪」の2つの用法がある。一方、被謝罪側の場合、「慰め」「表出」の用法がある。また、文末の「けど」は「言い終わり」としての使用数が「言いさし」よりも少ないため、本節では人間関係と場面深刻度を踏まえて、全体的な用法と使用特徴を分析する。

①謝罪側による言い終わりの「けど」の用法と特徴

謝罪会話の中で説明についての発話内容は「原因説明」「状況説明」の2種類に分けることができる。

会話例(5)説明(状況説明)

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

08G: あ: えっと:本あのだのくらい汚れたかな。

09S: や、表紙にちょっとあのだ:こぼしてしまって。

10G: あ、こぼしちゃった↑あでも表紙だけでしょう?

11S: はい表紙[一応表紙ですけど。

12G: [あ、表紙じゃ:

13G: あ、うんうんうんじゃ全然問題ないから。

会話例(6)説明(原因説明)

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

008S: ちょっとね、この辺汚れちゃって。

09G: あ:なるほど。

10S: それで、でも大丈夫かなと思って一応確認したいと思って、
[今日来たんだけど。

11G: [あ、ま

12G: この本、一回を読んだやつがあるんで。

会話例(5)は被謝罪側の本を汚した場面である。被謝罪側が「本あのだのくらい汚れたかな。」と質問した後、謝罪側は「一応表紙です」と断定的に答えることもできるが、「一応表紙ですけど」と言うことで、自分の判断を和らげつつ、相手に対する遠慮の気持ちを示すことができる。謝罪側が「けど」を使って自分の判断を和らげることで、断定的な言い方を回避し、相手に対する遠慮を示すことができる。このような言い方は、相手を立てる意図や恐縮の気持ちを表すことができると考えられる。

会話例(6)は謝罪側の本を汚した場面である。本を汚したことは被謝罪側の感情を傷つける可能性がある。謝罪は人間関係の修復を目指す言語行動であり、被謝罪側の感情を傷つけずに適切な説明を行うことが重要である。「一応確認したいと思って、今日来たんだけど」のように「けど」を文末に付け、自身が言った内容を補足し、説明の意図を明確にすることができる。このような使い方の「けど」は先行の文で自身が言った内容を補充する機能があると考えられる。

「謝罪」の用法は「申し訳ないんですけど」のような謝罪表現と併用する慣用表現である。謝罪表現と一緒に謝る気持ちを表している。「けど」はなくても、表したい内容はすでに伝達された。この場合の「けど」は終助詞の機能をしていると考えられる。また、「けど」を言いさし表現として使う場合「申し訳ないですけども」のような謝罪表現と併用されることも観察される。使い分けについて、白川(1996)は「相手に続きを言わせているのか」「相手伺いか」の2点から判断できるとしている。言いさし表現の場合、「けど」は前置きの用法である。謝罪会話の開始部に見える。言い終わりの表現の場合、「け

会話例(3)相手伺い

(解決提案をあげる場合)

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

20S: もしなんか。

21G: はい。

22S: あの、ま、今使うとかなったら。

23G: あ、全然[大丈夫です。

24S: [今日買い換えるとかします
けど。

ど」は終助詞の機能を発揮する。謝罪会話の中間部に見える。

②被謝罪側による言い終わりの「けど」の用法と特徴

以上の例から、被謝罪側の気持ちを配慮する発話が多く見える。それに対して、謝罪会話の中で謝罪側の気持ちを配慮する発話も観察できる。例えば、以下の例(7)は謝罪側を慰める場合である。

会話例(7) 慰め

Sは謝罪側 Gは被謝罪側

- 10G: いいえいいえ, [Sの名前] は大丈夫ですか? ありがとうね。
11S: あ, 私は全然大丈夫なんです, [Gの名前] 大事な本を汚れて
しまつて: 申し訳なかったんです。
12G: いいえいいえ, え: まね, あの [Sの名前] に何もなければ
よかったですけれども。

会話例(8)は被謝罪側の本をなくした場面である。被謝罪側は発話16Sの「まじ?まじ?」や18Sの「本当!」によって、本をなくしたことに対する驚きや衝撃を表している。発話20Sによって、被謝罪側の驚きや衝撃の感情が具体的な出来事に関連付けられる。また、発話20Sの「一生でももらえない」という表現からは、本を賠償するだけではこの事件が解決できないことが示唆される。また、発話20Sは反対意見を表明することではないけれども、相手の感情を害する可能性がある発話である。この場合の「けど」は発話を緩和することができると考えられる。

会話例(7)は被謝罪側の本を汚した場面である。GはSの先生であり、上下関係にある。被謝罪側が謝罪側の複数回の謝罪に対して、被謝罪側が発話12Gの「何もなければよかったですけれども」で、謝罪側に「大丈夫・許した」の意味を謝罪側に伝達する。これによって被謝罪側は謝罪側の心理的な負担を軽減し、双方の関係を修復しようとする意図が示される。「けど」をつけることにより、自分の考えや感情を伝達できると考えている。

会話例(8) 表出

Sは謝罪側 Tは被謝罪側

- 15T: なんと, あの本なくしてしまったみたいで:
16S: え: まじ?まじ?
17T: そうね: ごめんなさい。
18S: 本当!
19T: うん。
20S: いや, [名前] 先生のサイン, 一生でももらえないかもしれない
いんだけど。

5. まとめ

本発表では、謝罪会話における文末の「けど」の用法と使用特徴を考察した。特に、言いさし表現の「けど」と言い終わりの「けど」の二つの側面に着目して、考察を行った。その結果、全体的には、ケド、デ、カラ、ノデ、ダカラ、ガの6種類の文末の接続助詞を使っている。そのうち、ケド類の使用は最も多いことが分かった。言いさし表現の「けど」の場合、謝罪側の用法は「前置き」「相手伺い」「弁明」の3つがある。対等関係よりも上下関係において、謝罪側は言いさし表現「けど」を多用する。「前置き」ではいずれの深刻度にも多く使われる。被謝罪側の用法は「相手伺い」と「追及」である。言い終わりの「けど」の場合、謝罪側の用法は、「判断の緩和」「原因の提示」「謝罪との併用」である。被謝罪側の用法は「共感」と「表出」であるということを示した。

参考文献

- 郭碧蘭 (2013). 日本人大学生による謝罪行為の談話構造—社会的ファクターが与える影響に着目して— 明海日本語, 18 増刊, 251-258.
小此木江利菜 (2020). 依頼談話における言いさし表現「けど」に関する考察—機能と負担度に着目して— 日本文化学報, 86, 25-41.
白川博之 (1996). 「ケド」で言い終わる文 広島大学日本語教育学科紀要, 4, 9-17.
永田良太 (2001). 接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能 社会言語科学, 3(2), 17-26.
曹英南 (2000). 「けど」で終わる発話の語用論的研究—「言い終わり」の「けど」を中心に— 言語文化と日本語教育, 19, 89-100.
朴仙花 (2008). 現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—「けど」「から」を中心に— 言葉と文化, 9, 253-270.
ボイクマン総子・宇佐美洋 (2005). 友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較— 語用論研究, 7, 31-44.
三原嘉子 (1995). 接続助詞ケドモの終助詞的用法に関する一考察 横浜国立大学留学生センター紀要, 2, 79-89.
頼美麗 (2005). 依頼におけるお詫び・謝罪型表現に関する考察—日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象に— 早稲田大学日本語教育研究, 6, 63-77.